

二の足の桐紋 (拡大)

地板は、二の足縁から24.5cmのこので、二の足から「貴金物」まで23cmの間隔だったと思います。「貴金物」から「鐙」先まで20cm程と推定して、鞘は全長60cm余りと想像できます。「柄」を20cmとして全長80cmと小ぶりなのは奉納用だからです。柄も当然覆輪で、目貫金物は高肉彫りの桐紋だと思います。春日大社には足利氏奉納と伝える桐紋の「金装花押散兵庫鍔太刀」があります。桐紋は、春日大社の足利氏奉納太刀の金物、また三代將軍義満の袈裟や法服の紋様や、十代將軍義尚の出陣影の直垂の紋様に描かれ、永禄三(一五六〇)年、十三代將軍義輝より毛利氏が拝領の赤地錦直垂に意匠されています。また永禄四(一五六二)年に三好氏と松永氏に桐紋使用を許可しています。関東公方足利持氏以来の公方家の年中行事を記した『殿中以下年中行事』にも公方が桐紋の直垂着用の記事がみえます。

この太刀の記録は大正一四(一九二五)年刊行の「東京府史蹟名勝天然記念物調査報告書 第三冊」の「三田村御嶽神社」の項で、部分写真を掲げ「帯金物に桐紋を刻せるものは、足利將軍家より奉納せる長覆輪桐紋太刀と称せらるるもの云々」の記述が初出ですが貴重です。それ以前の御嶽神社宝物目録にないのは、刀身が木刀であったからでしょう。小さな刀身が木で、簡略化が意匠や構造に及び、製作は粗雑でも足利將軍家奉納の伝承があったのではないのでしょうか。さてこの太刀の奉納の年代は多分、永享五(一四二三)年代、京都の室町幕府の六代足利義教と対立して自滅した関東

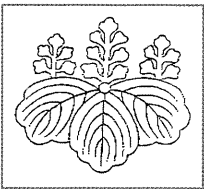
公方の足利持氏の「永享の乱」に先立つ神仏への祈願の折のものではないでしょうか。永享五年三月二三日、持氏はまず鶴岡八幡宮寺に「御嶽版(立川普濟寺版)」の「五部大乘経」の未刊分六〇巻を補写して、全二百巻を一揃として奉納します。「五部大乘経」は「保元物語」で宗徳上皇が魔道に回向したともある経典です。翌六年三月十八日には「五部大乘経」と同じく持氏は上杉憲直を奉行として「鶴岡八幡宮寺」へ「大勝金剛尊像」を造立奉納、持氏の血書の願文が残る、「武運長久・子孫繁栄・殊者攘夷咀怨敵(殊には呪詛の怨敵を攘い)」と祈っています。持氏は結局敗北、鎌倉の永安寺で永享十一年二月一日自害し、「結城合戦絵巻」(※1)に関東公方四代足利持氏が「桐紋」の赤地金襴の直垂姿で描かれているのは印象深いものがあります。祈願の奉行だった上杉憲直は早く、永享一〇年一月六日、称名寺で自害します。

なお御嶽の桐紋鍍金長覆輪太刀の、二の足金物上につく鉄環は小さくて、兵庫鍔の取り付け無理なので、時代の下降もあるから、黒革の革の足緒(帯を通す綱)になっていたと思います。奉納用ですから「一の足緒」に三つ、「二の足緒」に四つ、鍍銀の「七ツ金」がついたかもしれません。「兵庫鍔」ではなかったかと思えます。

大破し粗製といえども、権力者の中世寺社へ奉納の格式ある「鍍金長覆輪太刀」の形式を今に伝えた最後の遺物資料と思えます。

また、中世の末期まで鎌倉幕府に引き続き、鎌倉(関東)府の公方の尊崇をう

下: 応仁・文明年代成立という、武家の家紋集『見聞諸家紋』の足利家の桐紋



右: 『結城合戦絵巻』の鎌倉・永安寺での足利持氏の最後。頭髪は出家剃髪形。

二図とも『國華』90号・91号所載川崎千虎「本邦武裝沿革考」による

※1

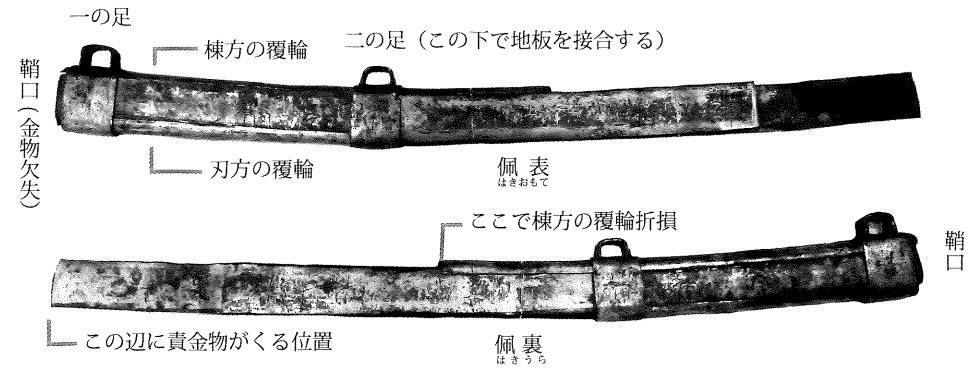
計測・調査では、私と共に山岸素夫先生門下の学友西岡文夫氏、また青梅市教育委員会・文化課課長の北村和寛氏、当社権禰宜天野宣子氏の協力を深謝しています。また嗣永芳昭氏「立川普濟寺版について」(立川市史研究 第七冊)昭和四二年・市史編纂委員会編 所収)の学恩を得ました。

公方の足利持氏の「永享の乱」に先立つ神仏への祈願の折のものではないでしょうか。永享五年三月二三日、持氏はまず鶴岡八幡宮寺に「御嶽版(立川普濟寺版)」の「五部大乘経」の未刊分六〇巻を補写して、全二百巻を一揃として奉納します。「五部大乘経」は「保元物語」で宗徳上皇が魔道に回向したともある経典です。翌六年三月十八日には「五部大乘経」と同じく持氏は上杉憲直を奉行として「鶴岡八幡宮寺」へ「大勝金剛尊像」を造立奉納、持氏の血書の願文が残る、「武運長久・子孫繁栄・殊者攘夷咀怨敵(殊には呪詛の怨敵を攘い)」と祈っています。持氏は結局敗北、鎌倉の永安寺で永享十一年二月一日自害し、「結城合戦絵巻」(※1)に関東公方四代足利持氏が「桐紋」の赤地金襴の直垂姿で描かれているのは印象深いものがあります。祈願の奉行だった上杉憲直は早く、永享一〇年一月六日、称名寺で自害します。

なお御嶽の桐紋鍍金長覆輪太刀の、二の足金物上につく鉄環は小さくて、兵庫鍔の取り付け無理なので、時代の下降もあるから、黒革の革の足緒(帯を通す綱)になっていたと思います。奉納用ですから「一の足緒」に三つ、「二の足緒」に四つ、鍍銀の「七ツ金」がついたかもしれません。「兵庫鍔」ではなかったかと思えます。

大破し粗製といえども、権力者の中世寺社へ奉納の格式ある「鍍金長覆輪太刀」の形式を今に伝えた最後の遺物資料と思えます。

また、中世の末期まで鎌倉幕府に引き続き、鎌倉(関東)府の公方の尊崇をう



本シリーズ11「三鱗紋兵庫鍔太刀の帯取金物」では鎌倉時代の長覆輪太刀残欠の帯取金物二点の考察から、この太刀は蒙古襲来のころ、鎌倉幕府奉納の祈願用に製作の太刀であるとの報告をいたしました。二点の各々の寸法や、彫技の相異から、二振分の太刀の可能性もあり、祈願は二度あったかもしれません。注目すべきは、祈願用の奉納太刀なので形状は一応立派ですが、粗製で実用にならない製作という点です。丁度生きた馬の代わりに、絵馬を奉納するのと同じです。遺例は稀少なので注目されるのです。御嶽の三鱗紋兵庫鍔太刀と同じ意匠の帯取金物の長覆輪太刀が埼玉県浦和市の氷川女体神社にもあり、重要美術品指定で、御嶽神社の奉納用に作られた在りし日の三鱗紋(長覆輪)太刀を偲ぶことができます。シリーズ11の伊藤博司氏の復元画は、氷川女体神社の太刀に依ったものです。絵にする上立派なのですが、「柄」などは地板もなく、木地に金箔を貼り、刀身は実用にならないし、鞘の地板なども他からの転用材で彫技もあらいのです。

しかし、氷川女体神社や御嶽権現が武蔵国の国司(守護兼帯)であった鎌倉幕府の執権北条氏の祈願を大事件にあたっ

てうける程の社格を、鎌倉時代に有していた可能性を示唆するに十分な歴史資料といえます。また注意にかなう格式の太刀とは何様のものであったか、ということも伝えます。

三鱗紋太刀が執権北条家と関わりを伝えるように、「桐紋」(「五七桐の臺(花)紋」。以下桐紋)の「鍍金長覆輪太刀残欠」は室町幕府の將軍や関東(鎌倉)府の公方の紋所であることにおいて、室町時代も同じ社格の御嶽権現であったことを伝えます。最古の紋帳で、文明二年(一四七〇)頃成立の『見聞諸家紋』にも桐紋を描き、足利氏の紋とあります。

表側(佩表)に五個、裏側(佩裏)に七個も、地板や帯金に残された桐紋を念頭に、大部分が欠失、大破した「桐紋鍍金長覆輪太刀」の細部を観察、復原してみましよう。

鞘全体に、大破。佩表の地板は、鞘の半分で折損、欠失。佩裏は地板が貴金物刃りまで残りますが、後方の木鞘と覆輪・地板・貴金物・石突を欠失します。鞘口金物も欠失して、辛うじて一の足と二の足のみで残った地板と覆輪、芯の木鞘をまとめている状態ですが、旧状を想定できるのは貴重です。鞘口金物が欠失なので、一の足を鞘口の方へ移動して現状を保つわけです。鞘口の縦径(高さ)2.7cm、横径(幅)1.1cm、木鞘の横径0.7cmくらい。厚さ0.3cm弱の木刀の刀身が詰められています。小さな鞘口寸法は、復原推定6.0cmという鞘の長さに対応します。古い奉納用太刀は小形でもきちんと作る例もあ

りますが、御嶽のこの太刀は年代の下降と制作の粗放さを感じます。

二の足の金物下では地板が接合されています。この部分は鍍金が旧状の光を失わず鮮やかに輝き、地板の切放し、接合の様子が観察できます。かなり粗雑です。二の足はゆるんでいて後方へ移動可能な状態です。大破しているので構造を観察できるのは貴重です。従って二の足は本来の位置にあるわけですから、原位置を動いたのは一の足ということになります。

御嶽の重文指定の「鍍金長覆輪太刀」と同じく奉納用としてこの太刀も、一、二の足の金物は簡略な帯金である点は注目されます。一の足の旧位置は、少なくとも2.0cm程後方へ移動した辺りです。二の足との内側の間隔は8.0cm位でしょう。なお一の足と鞘口の間には桐紋を配する余裕はないと思います。こうした太刀を佩くと表側になる面(側)を「佩表」といい、現状で32.3cm程、佩裏は40cm残ります。なお、二の足より後方の覆輪は棟方に7.0cmのみ残ります。切放しの帯金の「一の足」の幅は、棟方で2.2cm、刃方で2.3cm、高は前方で3.0cm、後方で2.8cm、二の足で幅2.2cmと2.3cm、高2.6cmと2.5cm位で、足は刃方に広めに、鞘は後方へ細めてゆく傾向を示します。一・二の足には桐紋を彫りつけます。

桐紋は、一・二の足の間に二個、二の足と欠失した「貴金物」の間に三個、「貴金物」と鐙(石突)金物との間に三個あったと推定します。佩表に残る桐紋三個の

〔連載〕武蔵御嶽神社宝物シリーズ 28
 日本風俗史学会 会員 齋藤 慎一
 前青梅市文化財保護審議会 会長

「桐紋 鍍金長覆輪太刀鞘残欠」